

— 第2回弘前大学附属図書館主宰学術講演会 —

昨年に引き続き、弘前大学附属図書館主宰の第2回学術講演会が、平成17年11月25日の午後4時から、弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールで、「世界から、そしてアジアから見た日本文化」と題して、現在法政大学特任教授で、世界で活躍中の文化人類学者である青木保先生を招いて開催されました。

異文化に触れるということ

人文学部 澤田 真一



平成17年11月25日、みちのくホールに集った130名の聴衆の中には、ぽつりぽつりと、あるいは数人で身を寄せ合った国際色豊かな留学生たちの姿が見受けられる。附属図書館主催による講演会の演者は、日本を代表する文化人類学者のひとり青木保氏。演題は「世界から、そしてアジアから見た日本の文化」。文字通り世界をフィールドに駆け巡る青木氏の文化論の根底には、人間は多種多様な差異一人種、言語、宗教、文化、価値観等一を乗り越えて、共同性を打ち立てることができるという希望がある。

かつてブラジルの小説家パウロ・コエーリョは、異文化の中に飛び込む行為としての旅を再生に喩えた。すべてが目新しく、言葉にも習慣にも不慣れな環境に適応して生きていくために、人は土地の人間の話す言葉に必死に耳を傾け、彼らの一挙手一投足を凝視する。異国での体験は、人を生まれたばかりの赤子の状態に引き戻し、自分の無力さと小ささを思い知らせる。しかし、この不自由さは同時に新たな成長の機会となり、人の器を大きくしてくれる。青木氏は『異文化理解』の中でこう語っている。人は自分が生まれ育った「文化」という枠で束

縛されているが、異文化に触れることを通して「文化の殻」を破り、「何か違ったもの」を摂取することで自分の生活をさらに豊かなものとするができる。国際的な共通語としての英語の世界的な普及のため、英語を母国語とする人間は、世界中どこを旅しても、わざわざその国の言葉を勉強したり文化に習熟する必要なしに、何とか暮らしていくことができる。弘大の姉妹校、オークランド工科大学の前学長ジョン・ヒンチクリフ氏は、



この便利さを「不幸なこと」と呼んだ。不自由を味わうことから除外されることは、異文化理解と共感に基づいた多文化社会構築の助けにはならないからである。果たして我々日本人の内には、外国旅行や留学に付随する「不自由さ」を「特権」と捉えうる視点が存在するであ

ろうか。

講演の後半、トピックは日本の側からの世界へ向けての文化発信、文化外交の必要性へと移行していく。国際政治を専攻していない学生にとって、軍事力や経済力によらずに文化的な魅力によって他国に影響を及ぼし、好ましい結果を得るという、ジョセフ・ナイの「ソフト・パワー」という概念は、新鮮に聞こえたに違いない。都市中間層を主体とした大衆文化の共有を皮切りに、表面的



な差異の背後に隠れている共通性を見つけ出し、それをひとつひとつ積み重ねて堅固な基盤としていくことが必要であるという東アジア共同体構想への展望で、1時間にわたる講演に幕が下りる。

果たして大学は学生に対して十分な文化教育を行っているだろうか。国際的な知識と国際的な経験を提供しているだろうか。留学生は宝物であるという意識を持っているだろうか。自分にできることは何であろうか。青木氏のメッセージは、心に波紋を起こし、その波紋は広がっていく。

学生たちがどのように感じたのかを知りたくて、会場を出ると私はすぐにゼミ生を呼び止めた。

(さわだ しんいち)

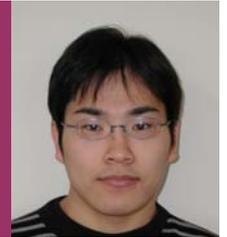
左から青木先生、遠藤学長、雨森館長、中沢理事



国立大学法人弘前大学附属図書館第2回学術講演会 平成17年11月25日

附属図書館第二回学術講演会を受講して

人文学部情報マネジメント課程 4年 島 和佐



今回の学術講演会に参加したのは講演者が法政大学大学院特任教授青木保氏であったからである。一緒に参加した友達は異文化理解に興味があり、僕は自分の経験や大学生活において異文化に触れる機会があり、そのことがグローバル化及びアジア化にある日本とどのような関係があるのか知りたいと思った。

青木先生がご講演の中で強調されていた点は、和と共生の尊重を「東アジア共同体」構築に向けて積極的に日本が文化外交において推進すべきであるということだった。その外交は政治に限らず、高等教育、大衆文化、

観光、国際協力といった分野も含まれ、インターネ



ットを例とする情報革命によって日本の動向が世界各地へと伝達される現状を踏まえると、その文化外交の重要性は明らかであるとされた。身近な代表例は「韓流ブーム」であり、青木教授が東アジア共同体評議会有識者議員として執筆参加された著作『東アジア共同体と日本の針路』ではそのブームがシンガポール、タイ、台湾そしてフィリピンといった周辺各国へと広がっていると先生は書かれていた。

青木教授はこうした「東アジア共同体」における文化構築において、「都市中間層」がその担い手になると書

いている。上流富裕層でも一般庶民でもない、高学歴で合理的判断を好み、宗教やナショナリズムにとらわれずコミュニケーションを行いやすいその中間層が他国との文化構築を推し進めるとし、グローバル化においてもその地位は変わらないとしている。格差社会とは、大げさに認識することなく、豊かさの中で個人がその嗜好と選択によって人生設計をする社会であり、海の向こうに同じような思いや考えを持った人々が一緒に生きていこうと手を差し伸べることは純粹にありがたく、その手を握り返すことが必要ではないかと思う。

日本人は今、自分達だけを見てはいけない。時代遅れである「外人」観念を捨て、共に生きる術を見つけ発展していくことが今日の日本における若い世代、そして「東アジア共同体」構築において最も大切なことではないかと思う。

(しま かずさ)

